

【複式提案】

自ら問題意識を持ち、かかわりを深めながら学び合う子どもの育成

～ 一人ひとりを大切にし、互いにひびき合う授業づくりを通して ～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) めざす子どもの姿

複式教育には、「異学年」、「少人数」という二つの大きな特性がある。1年生と2年生、3年生と4年生、5年生と6年生という隣接学年が一つの教室で学ぶ意義は、教師と子どもというかかわり以外に、教えてくれる上学年の子どもと教えられる下学年の子どもというかかわりが存在することである。このような異学年のかかわりには、同学年の子どもだけの集団には見られないゆずり合いや思いやり、そして厳しさや責任の自覚などが内在する。複式学級では、他学年や同学年の友だちを意識した学習を展開することができ、協同的に学習する場が常に設定されている。そして複式学級独自の主体的な学習の進め方に慣れ、自己表現力を身につける過程で、子ども一人ひとり（個）にとっての学習の意味や内容がひろがっていくことになる。このような複式の特性を最大限に生かしながら、教育効果を高めていく授業のあり方を追究していきたいと考えている。そして、学びの主体である子ども一人ひとりの気づきや疑問を大切にし、自力解決したり、話し合ったりする場で自分の考えを表現でき、学ぶ喜びを感じ、互いにひびき合う子どもを育成していきたいと考えている。また少人数の利点を生かして、教師が子どもに寄り添ったきめ細やかな支援をすることにより、一人ひとりを理解し、大切にできると考えている。

テーマをもとにした実践方針として「一人ひとりの気づきや疑問を大切にした課題設定を工夫する」と「話し合い活動や体験活動を通して子どもの主体性や表現力を高める」ことに取り組んでいきたいと考えてきた。

そのために、授業では、間接指導時に学習リーダーが中心になって進められるような授業を積極的に行ったり、学年差を生かしたペア学習の充実を図る。また、指導者が子どもとまなざしを共有し、一人ひとりの学習課題を的確につかんだ上で、授業改善を行う。

テーマをもとに考えた複式のめざす子ども像は、下記の5点である。

① 明るく、素直で、やさしい子
② 自ら進んで課題に取り組む子
③ 協力し合って取り組み、「自分づくり・仲間づくり」をする子
④ 話をきちんと聞き、コミュニケーションによる練り合いによって共に高まろうとする子
⑤ 体験を通して自分でやったという自信を持ち、自分の成長や向上に結びつけようとする子

研究テーマや複式のめざす子ども像をふまえながら、各学年や発達段階に応じた学びを進めることは、「意味や内容をひろげる」という本校研究主題ともかかわって大切なことである。そこで、次のように各学級の学習におけるめざす子ども像を設定している。

1・2年	授業中の学習ルールがわかり、元気よく学習に取り組む子
3・4年	学習の進め方や仕方がわかり、意欲的に学習に取り組む子
5・6年	自分で見通しを持って学習計画を立て、主体的に学習に取り組む子

それぞれの教科において、子どもたちは課題に取り組んでいる。その課題は指導者が提示したものもあれば、子どもの思いから出た自らのものもある。それらの課題について司会の子どもが指名し、子どもたちが次々と考えを発表していく。その考えは記録係の子どもが黒板にまとめていく。このような形態の学習が、国語や算数を中心におこなわれる学年別指導の授業でされている。この時に一通り意見を出し合うと学習の終末を迎え、司会の子どもがまとめて授業を終えることが少なくない。この場合においては、ただ一人ひとりの考えを出し合っただけであり、課題を追求していても、追究するまでには深まっていない。そこで、司会を育て、話し合いを深化させたり、意見発表者の表現力や書記の文章構成力を高めたりしなくてはならない。

学習の進め方・深め方の基礎

話し方（相手の心にまで届けるように）・聞き方（聞いて返せるように）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 友だちに聞こえる声で、最後まではっきりと話す。 ・ 友だちの方を見ながら、順序を考えて話す。 ・ 話し手の方を向き、友だちの考えを受け止めながら、内容をしっかり聞き取る。 ・ 考え方が似ている点や異なる点を見つけながら、最後までよく聞く。 ・ 必要に応じてメモを取りながら聞く。
司会の進め方
<ul style="list-style-type: none"> ・ みんなに公平に当てる。 ・ 同じ意見や違った意見を整理してまとめる。 ・ 話し合いの場で、考え方の理由や説明を引き出す。 ・ わからない子や納得していない子に時間を十分にとって説明していくようにする。 ・ 質問や感想、アドバイスなどの多様なやりとりを考える。 ・ 学習の目標をふまえ、計画的に進める。

例えば、話し合いが停滞した時、観点を再度確かめたり、意見の違いを整理したりしていくような積極的な司会の役割意識を育てることや一人学習の時間を確保して、自分の考えを整理させ、根拠をはっきりさせた話し方を身につけさせることが必要である。また、友だちの考えと似ているところ、違うところを見つけながら聞き、友だちの意見と比べ、話させる指導も大切になる。

このような話し方や司会の役割は、学年を追って積み上げていくことが必要であり、時と場をとらえて、指導すべきことがらでもある。

発達段階の違い 2 学年が同じ教室で学習するという複式学級の特徴は、子どもたちの思考を深めひろげることにもつながる。

算数科 5 年「面積」、6 年「体積」を例に挙げる。5 年生は自分たちの平面図形の求積を進めながら、6 年生が学習している立体図形にも興味を持っていく。また 6 年生は、1 年前に学習した内容を振り返り、今の自分たちの学習に生かすことによって深まった復習の学習になる。1 授業の中で 2 学年の交流やかかわりをねらうこともある。しかしこのようなことは、指導者が意図して計画できるものばかりではない。知らず知らずのうちに互いに激し合い学んでいる姿である。同単元同内容指導においても、上学の思考に刺激され、下学年も深い考えを理解したり、下学年の活躍触発されて、上学年が意欲を喚起する場合がある。

このように自己表現力や司会者の育成・異学年の良好なかかわり基として、子どもの追求を追究へと深めていくことが大切である。



(2)「意味と内容」がひろがる複式学級の学び

子どもたちの「真の学びの姿」は、その子なりの見方、考え方、感じ方を持ち、他者とのかわりを保ちながら粘り強く追究を続ける中で自己形成をしていく姿をさすものであると言える。

複式学級においては、異学年・少人数という特性が存在するが、子ども一人ひとり（個）を尊重し、その追究過程をみとっていく姿勢においては、単式学級と何ら変わりはない。少人数であるからこそ、個に寄り添い子どもの真の学びを支援することがより大事になってくる。個を育て、一人ひとりに自信や意欲を持たせることが子どもを真の学びに浸らせる道筋である。

①複式学級における意味

複式学級で学習する意味は、異学年・少人数における子ども相互のかかわりそのものである。

複式学級の子どもたちがかかわりあいながら学習を展開する。多くの場合指導者は、子どもの学習を見守り、学習のガイド役（司会）を子どもにゆだねるのであるから、子どもたちのかかわりの質が直接学習内容に反映される。つまり、一人ひとりの子どもが互いに公平にかかわり、どの子どもが発言しても、耳を傾け、認めようとするし、困っていれば、支えよう、助けようとするような、支持的風土に基盤をおく学習文化をもとにした集団の形成が必要になる。そのために、指導者と子どもというかわりもさることながら、子ども相互のかかわりの質を高めることが不可欠となる。子ども相互に真摯な態度と互いに尊重し合い共感し合う支持基盤を育てること、言い換えれば学び方としての子ども相互のかかわりの質を高めることが複式学級の意味をひろげることになるととらえたい。かかわりの質が高まることにより集団自体の意味もひろがるとともに、集団を形成する一人ひとり（個）の意味もひろがることにつながると考えた。このように、複式学級では、学び方のよりよい変容を意味のひろがりとしてとらえたのである。

②複式学級における内容

複式学級で学習する内容は、子ども一人ひとりが自分なりのめあてを持ち、集団の中で刺激を受け合いながら自信を持って自己表現することである。

子どもたちには個々にハードルの高さは違っていても絶えず乗り越えなくてはならない壁が存在する。それは学習におけるめあてと言ってもよいであろう。一人では越えられない壁も集団の中で切磋琢磨することや良い意味での競争により、乗り越えようと励むことができる。その時には、学習する意味で述べたようなかわりの質が問われるのである。例えば、朝の会にみんなの前で発表する。小さな声で聞き取りにくくても、しっかり聞こうとする集団を前にして、消極的な子どもも聞いてくれる友だちを意識することで徐々に自信を深めるようになる。さらに、発表した内容に対して、様々な質問や感想が出され、それに答え続ける中で小さな自信の芽はさらに膨らみ、より大きな自信となって、みんなの前に出ることに対する緊張感がなくなり、発表することに対する壁を乗り越えていく。このように、子どもは自信をつけながら自己表現を続けることになり、また他の子どもたちも、その姿を自分にとっての良い刺激ととらえ、意欲を喚起しながら学習を進めることができる。このように互いにかかわりながら自己表現をすることにより子どもは、よりよい学び方を身につけ、より主体的に学習に取り組むことができる。子どもが一つひとつの壁を乗り越えた時に自信がつき、成就感・満足感を感じる。この歩みの過程が内容のひろがりとしてとらえたのである。

つまり、子ども一人ひとりが学ぶ喜びを感じ、自信を持って学習に参加し、自己表現できるように励む姿を内容のひろがりとしてとらえたのである。

2. 複式学級におけるまなざしの共鳴

子どもたち同士の「まなざしの共有」の先にあるステップが子どもたち同士の「まなざしの共鳴」であると考えた。これまで「まなざしの共有」を、複式の授業では二つの面から考えてきた。

一つ目の共有は、指導者と子どもとのまなざしの共有である。これは、指導者が子どもの思いに寄り添い共感したり、時にはわざと子どもの発言をゆさぶるような投げかけをして、子どもと同じ立場に立ったり、共に学ぶ姿勢を持って授業に臨むことであると考えた。

二つ目は、子ども同士のまなざしの共有である。これは、学習課題に子ども一人ひとりが真剣に向き合い、納得したり、考えの違いを意識したりしながら、子ども個々の学習成果や人格をもとにして、磨き合う学習の場でめざしたい子どもの表情や雰囲気といったものである。このような場面を現出させるためには、子どもが表現したくてたまらないような切実感のある課題が必要なのは言うまでもない。そのために、各教科の学習において大切にしなければならないことは、子どもの思いをもとにした単元を構成することである。低学年においては、子どもの様子やつぶやき等から、子どもの興味・関心を探り指導者の支援のもとに課題を設定しなくてはならない。高学年では、作文や日々の発言内容をもとに個の考えから課題を設定することもできる。また、磨き合う学習の前に自分の考えを整理するための一人学習の場も設定することが必要である。

一人学習の充実や子ども個々の考えを大切にし、子どもの思いに寄り添って学習を展開することは単式でも複式でも同じである。しかし、指導者が直接かかわれない間接指導の時間が多くなる複式の学習においては、子ども同士のまなざしの共有が多く、指導者と子どもとのまなざしの共有に限られることが少なくない。そのために、これまでに述べてきたような、自分たちで学習を進められる表現力やコミュニケーション力、さらに、学習を進めるポイントをにぎる司会の育成が必要不可欠である。また、その根底には、一人ひとりが大切にされ、厳しい中にも温かみのある集団の育成がある。また、指導者の出番が限定されるために、間接指導に移る時の指導者の発言やタイミング、そして直接指導への指導者の入り方も重要になってくる。簡潔に課題を伝え、一人学習や話し合い学習にスムーズに入れるような間接指導前の指導者の指示や、子どもたちの活発な話し合い活動の流れを断ち切らない発言の配慮もしなければならない。

指導者が効果的に子どもたちのまなざしの中に入っていくために、絶えず間接指導時の子どもたち様子を把握しておくことが必要ではあるが、それは物理的に難しいことである。そこで、学年の発達段階に応じて同時間接指導を取り入れていく。また、黒板に間接指導時の学習の足跡を残させておく。そうすることで、指導者も学習の流れを把握することができ、子どものまなざしの中に入りやすくなる。その場合にネームマグネットや短冊、発表ボード等を利用することにより、思いや考えを子どもたちも指導者も知ることができる。

まなざしの共鳴は、子ども同士のまなざしの共有をより深く進め、活性化していくことであると考え。同学年があるいは上学年と下学年が相互に考えなどを交流し合う相互学習の場を支持的風土が醸成される集団づくりの基で、授業が単に子どもたちの思考や知識の伝達に終わるのではなくて、本当の心の通じ合いによって、お互いの考えの違いに気づき共に高まる場にしていこうと考えている。そのためには、子どもたちそれぞれの双方向の伝え合いを通して、互いの考えを理解し、納得し合うことができる授業づくりを進める。このことが複式学級でのまなざしの共鳴となる。

複式教育では、このように、子どもたちのかかわって高まろうとする態度や意識を大切にし、また一方では、そのための表現力を育成しながら、課題に挑戦し自分を高め、自分づくりを追究していきたいと考えている。子どもたちの相互作用が機能的かつ効果的に働くことにより相互学習力が高まり、自信や学ぶ喜びにつながり、子ども個々が成長すると考えたのである。